

ディレクター日誌 (活動・研修生の様子)

期 日：前期：平成29年8月15日(火)～24日(木)【9泊10日】

後期：平成30年度での指導研修

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家及び県北部山域（山口市阿東）

研修生：県内の教員等6名

1日目「開会式・ダッフルシャッフル・バックパッキング」

期 日：平成29年8月15日（火）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

～滑川林道



平成29年度の研修会が始まった。今年度の研修生は6名（男性3名、女性3名）と少ないが、AFPYの活動が初めてであったり、下関のOBSキャンプに関わったことがある人がいたり、研修会への意欲の高いメンバーが集まった。研修会スタッフは、毎年のことであるが、研修生の思いを大切にしつつ、この活動をこれからも続けていくために来年度以降スタッフとして活動に関わってほしいという願いを持ち、これからの10日間を過ごしていく気持ちである。

開会式ではスタッフの養成を目的としていることと、何より参加者としてたくさんのかんじを感して心と体を動かしてほしいと話をした。今年はスタッフが1名怪我のために急遽参加できなくなってしまった。スタッフたちも自分たちが率先してしっかり楽しんで、「こんな仲間になりたい」と思ってもらえるように心がけるとともに、参加できなかったスタッフに元気を届けたいという思いを強く持ってスタートした。

昨年が続いて今年度も雨のために初日に予定していた沢登りができなくなってしまった。自然を相手に活動しているのでこればかりは仕方がない。1日の行程を考えて、内容を組換えながら必要なことをやっていく。これも、このプログラムの中では大切なことである。

装備の準備やダッフルシャッフルを開始し、10日間の準備をする。物の名前や使い方、場所も分からない中での活動だが、3名のスタッフがいい関わりをもちながら、ザックの中に必要な物品が入っていく。不安もあるだろうが、今はまだ笑顔で準備をしている。

マウンテンバイクの調整や練習をして、昼食をとってから午後には自然の家を出発して滑川林道へモービル移動をした。いよいよ山の中に入っていく。ひたすら薄暗い細い道を進んでいく車中の研修生は不安でいっぱいだったことだと思ふ。滑川について車を降りたら、そこからは本日のテン場（＝宿泊地）までバックパッキングが始まる。重たい荷物を持って歩く初めての活動である。順調に歩みを進め、テン場に到着した。テントやタープの張り方やテン場での決まり、食事のルール等を学び、ミーティングでは本日の活動を振り返りつつ、10日後、研修会を終えてた後の実生活へ向けての目標設定についてインストラクターから話があった。中身の濃い10日間にしてほしいと思う。

2日目 「バックパッキング」

期 日：平成29年8月16日（水）

場 所：滑川林道～飯ヶ岳～屋敷川林道

2日目の始まり。朝の動きはまだゆっくりしていて、先の見通しを立てたり時間の使い方を考えたりするにはもう少し時間がかかりそうである。

今日の活動はいよいよ山の中に入っていく。このたび最初のピークである飯ヶ岳の山頂を目指して登っていく。1日の行程としては短い設定であるため、歩き方・休憩の取り方・危険な動植物について等、時間をかけてレクチャーしていく。

途中、二手に分かれた道でコースを決める。どちらから進んでも山頂に着くのだが、選んで進んだコースが、山頂を目指しているのに一度下っていくというコースで、思いの外研修生にとってはハードな行程となり、インパクトが大きかったようである。それでも無事に山頂に到着。みんなで登った最初の山頂である。見えた景色、感動を忘れずに大切にしてもらいたい。

山頂からは急な下りである。ここでも下りの歩き方を学びつつ、手を取り合いながら下山した。本日のテマ場に到着後はディップ（＝水浴び）の予定だったが、テマ場に先客（マムシ）がいた。急遽場所を探してテマ場を変更した。ディップを楽しみにしていた研修生は早く水に入れたかっただろうが、参加者の安全と安心の確保は外すことができない。そういった話をし、指導者の視点についても知ってもらおう機会ともなった。ディップは、1日山を歩いた後なので、火照った体に沢の水が気持ちいい。自然の中で過ごすことで水や風、雨や日差しから守ってくれる木陰など、日常では感じることができないご褒美を受け取った。

ミーティングでは今日の活動を振り返りつつ、インストラクターから目に見える形での目標設定の話があり、それは修正したり加えたりしてもいいと伝えられた。研修生はお互いに感謝を伝えながら1日を振り返っていたが、スタッフからお互いの思いの伝え方やグループの意思決定について疑問も投げかけられた。明日の行程は前半に急な登りがあり、最短コースから逸れて飯ヶ岳のピークをとるルートが選択肢として示されている。今日の登りで2つのルートから選択したことも思いだし、しっかり仲間同士で向き合う時間を多く持てる1日にしてほしい。



3日目 「バックパッキング」

期 日：平成29年8月17日（木）

場 所：屋敷川林道～弟見山～仏峠

初日からスタッフに時間の使い方、時間設定の仕方に意識を向けられていた研修生だったが、この日の出発も予定より少し遅れたものとなってしまった。スタート時に装備（バンドナ等身につけるもの）の確認をするが、時間を取り戻そうとするためか

ザックの中から取り出すのは最初の休憩時にすることにして出発していった。これが結果的に今後の活動にいろいろ関わってくることとなる。

今日の行程の最初は、これでもかというぐらいの急坂を登っていく。途中にはロープが張ってあるようなコースだが、お互いに支え合いながら、分岐点となる稜線へ出た。ここで筋ヶ岳のピークへ行くかどうかのミーティングが行われた。研修生は30分かけて話し合い、筋ヶ岳のピークを目指すことになった。筋ヶ岳からの絶景は素晴らしい、しばらく全員で見とれていた。

筋ヶ岳を後にして、ここからはひたすら稜線を歩く。県境を示すために土が盛っており、要所要所には杭が打ち込んであるので、それを確かめながら歩く。地図でははっきり見えないアップダウンが続き、弟見山を目指す。そして後半は急な下りがひたすら続く。初日からの疲労もそろそろ出てきている頃である。お互いが声を掛け合いながら歩いている。

仏峠からスタッフが声をかける。元気な声がかえってきた。程なくして全員が無事に仏峠に到着。スタッフも含めた全員が仏峠で笑顔のハイタッチ。今日の行程は前半の山場である。急な登りや下り、グループの意思決定、たくさんのことを感じたと思う。それを大切にしてもらいたい。この日は、夜にかけて一時的に天候が崩れるということで、先にミーティングをして夕食となった。研修生の中には疑問やモヤモヤも少しずつ出てきている。明日以降の活動の中でもっと自分たちの思いを持って活動してほしいと思う。



4日目 「バックパッキング・ソロ入り」

期 日：平成29年8月18日（金）

場 所：仏峠～弟見山～屋敷川林道

本日の予定は三ツ頭を越えてクォーツバレーを目指す行程であったが、出発を控えた研修生の様子がおかしい。話を聞くと個人装備の笛を紛失してしまったとのこと。全員がテントや各自のザックの中を確認するが見つからない。どうやら一昨日のディップの場所に忘れてきたのではないかということだった。その後、これからのことについてミーティングが行われた。先に進むのか、探しに戻るのか、本当にそこに忘れていたのか。研修生の決定は、全員で昨日の行程を戻り屋敷川に笛を探しに行くとのことだった。スタッフは、探しに戻るということは10日間の日程の中で組んでいたプログラムのうち何かができなくなることや、全員の意思での決定であるのかを投げかけて再度ミーティングをしてもらった。その中では笛を紛失してしまった個人のことではなく、今日までのグループの動きにもスポットを当てて話し合いをした。グループの決定は変わらず来た道を引き返すとのことだった。

1日かけて歩いてきた道を引き返すのは気持ちも落ち込むことであるが、研修生た

ちは元気よく前日に下ってきた山へと登っていった。その後本部スタッフは急遽これからの行程について話し合い、2日間を犠牲にすることによって制限される活動の優先順位と組換えを考えた。本来なら今日は下半久という場所に着いてのソロ入りであった。ソロは今までの「動」の活動から「静」の活動となる。自分のことや仲間のこと、家族のことなどたくさんのことをグループから1人になって考える時間であるとともに、一度ゆっくり体を休める時間となる。可能な限りソロは入れてあげたいと思い、予定とは違うが屋敷川林道にてこの日にソロをすることとした。スタッフは前日下半久にセッティングしていたソロサイトを撤収し、屋敷川林道にソロをできる場所を探しに行った。

無事に6人が入れるサイトを確保し、セッティングを終えた頃、研修生が屋敷川林道に戻ってきた。無事に笛も発見し、全員で喜び合った。その後、今日はここでソロに入ることを伝え、ソロへと入っていった。まずは溜まった疲れを癒やしてほしいが、トラブルが起こったことがせっかくのチャンスでもある。振り返る材料がたくさんある。スタッフからも、今日のトラブルをきっかけとして考える宿題が出された。確保できる時間は少なくなってしまったが、たくさんのことを考えてほしい。



5日目 「ソロ明け・バックパッキング・フルーツパーティー」

期 日：平成29年8月19日（土）

場 所：屋敷川林道～弟見山～仏峠

例年ならソロ明けの後はフルーツパーティーをしてその場でステイ、たっぷり時間をとっているが、今日は仏峠まで戻らないといけない。一昨日の歩いた時間と可能な限りソロの時間を確保することを考え、ギリギリのラインでお迎えに行く。短い時間ではあったが別々に過ごした仲間との再会。話したいことはたくさんあるだろうが、まだ話してはいけない。全員が揃ってスタッフからソロ明けが告げられる。いよいよ話してもいい瞬間である。本来はこの後でフルーツを囲んで振り返りを行うのだが、今日のバックパッキングの間に話をする時間はたくさんある。ひとまず振り返りはおいて、次の活動に入っていく。



今日に至るまで、共同装備（テントや食材等のグループの荷物）の振り分けは男性が多く持って、女性の荷物が少なめとなっていた。これは子どもたちの活動でもあることなのだが、体の大きい子が重たいものを持ち、小さい子が軽いものを持つことが多い。初日から研修生は当たり前のように荷物をそのように分けていたが、食糧配給の日でもあるので、今日はスタッフが全ての荷物を6等分して研修生へと手渡した。スタッフには「平等と公平の違いとは？」「個人のチャレンジを奪っていませんか？」などといった思いがある。これから子どもたちと関わる上でも考えていかなく

てはならないことでもあるが、まだそれは伝えない。研修生は疑問を感じながらも荷物を持って3回目となる弟見山を目指して登っていった。

本来のソロ明け後の楽しみを歩いた後に入れてあげたいので、スタッフは仏峠で待っている間にフルーツパーティーの準備をする。研修生たちが仏峠に到着した。歩いたことがある道とは言え、容易な行程ではない。やりきった充実感と疲労がうかがえる。ザックをおろしてタープの前に並んだ研修生にフルーツのお披露目。大歓声が上がった。

フルーツパーティーの始まり。目の前に置かれたたくさんの果物を口に運ぶ。そしてソロの振り返りとともにミーティングを行う。振り返りでは自分の思いを伝えることの難しさ、グループの合意形成の難しさなど、今日まで感じてきたことが出てきた。スタッフからも今日の荷物の分配について「実際に持って歩いてみてどうだったか?」「『自分は〇〇だから』『この人は〇〇だろう』ってわかるの?」との問いかけもあった。自分たちで体験をしてもらい、子どもたちと活動しているときに起こりうることであることも伝え、参加者としての学びと指導者の視点としての学びを得る機会となったと思う。

6日目「グループツアー・ファイナルツアー」

期 日：平成29年8月20日（日）

場 所：仏峠～三ツ頭～クォーツバレー～上宇津根

今日からいよいよ先の行程に進める。研修生たちは、心機一転のスタートになった。

元気に三ツ頭に向けて登っていった。今日の行程は最初に急な登りがあり、その後は稜線を進む。後半には藪漕ぎも出てくるが、お互いに声を掛け合い、意識を向け合いながら進んでいく。順調な歩みで桐ヶ峠を通過し、クォーツバレーに下りてきた。

ここからはファイナルツアーとなる。今日までは、班についたスタッフが最初はしっかりとトレーニングをし、少しずつ距離を置いて活動を研修生に委ねてきた。ここからは研修生だけのツアーとなる。今日までの学び、グループとしての成長をいかしたツアーが素晴らしいものになることを願う。

毎年のことだが、ここまでくると活動が研修生に委ねられているので、スタッフは少し寂しいような嬉しいような感覚になっている。スタッフは、翌日十種ヶ峰の山頂で笑顔で迎えられるように準備をする。

今年度は3日目に日程とコースを変えたため、山道ではなく徳佐の町中を通るコースになった。安全確保のため道路の危険箇所にスタッフが立っている。元気な様子うかがえたり、記念撮影を依頼されたり、研修生たちは順調にツアーが進んでいるようだ。辺りが薄暗くなってきた頃、今日のテン場である上宇津根へ到着したとの無線が入る。夜はみんなで何を話すのだろうか、スタッフは側にいられない寂しさを感じつつ、明日のツアーが良いものになることを願った。



7日目「ファイナルツアー」

期 日：平成29年8月21日（月）

場 所：上宇津根～十種ヶ峰山頂～神角

朝、無線の向こうから元気な声で出発の連絡が入る。意気込んで進んでいたところ、先頭に行く2人が蜂に刺されたとのこと。適切な処置ができ、大事には至らなかったが、改めて山の中の活動における危険について知ることとなった。



その後のコースは、安全確保を第一に考えて林道を通るコースを進むことにしたそうである。先を見通すこと、グループの状態、いろいろなことを考えての話し合いができたことがすばらしい。

山頂に研修生たちがやってきた。お互いの健闘をたたえ合い、スタッフも含めた全員で笑顔でハイタッチをした。「Good job!」山頂は少し雲がかかっていたが、今日まで歩いてきたルートを見渡すことができ、この日までの行程に思いをはせる。途中のミーティングでは、1時間近く、互いの思いを伝え合いながらルートを決めたそうである。グループがまた1つ成長し、この体験を子どもたちに返してあげることができる仲間となってくれることをスタッフは待っている。

山頂から神角へ下山して、本日は神角神社にテン場をとる。今までは山の中だったが、トイレと水道がある。日常のありがたみを感じながら、ファイナルツアーを振り返る。前日の夜にしっかりグループで話すことができ、少しずつグループが成熟してきていることがあるのか、この日の夜は今までになく、自分を含め仲間へと目を向けた距離感の近いミーティングとなった。

3日目に笛を紛失し、これまでコースを変更してきて、予定していたロッククライミングはなくなったが、明日からは元の日程に戻りサイクリングが始まる。残る3日間、コースの締めくくりである。

8日目「グループツアー」

期 日：平成29年8月22日（火）

場 所：神角～須佐エコロジーキャンプ場

起床して準備をし、出発前に神角神社周辺で再度マウンテンバイクのトレーニングを行った。須佐に向かう国道に出してしまうと交通量が多いためである。

神角を出発して須佐までのマウンテンバイクによるグループツアーが始まった。マウンテンバイクの調整やギアチェンジの仕方、ブレーキの掛け方やサドルへの腰掛



け方といったマウンテンバイクに関すること、車間距離の取り方や路面のとらえ方といった自転車に乗る上で注意することなどを、道路交通法と結びつけて確認しながら須佐を目指す。

順調にツアーを進めていたが、途中の長い下りを終えたところで研修生の1名が転倒してしまった。顔に擦り傷があり、不安による軽いショック症状も出ていたが、スタッフが落ち着いて対応する。傷が深いため病院へ搬送することとした。全てを見ていた他の研修生たちは、しばらくその場に立ち尽くしてしまっていたが、残ったスタッフが彼らを落ち着かせる。研修生たちはこれからのことを考え、今できること、これからのことを考え、病院から帰ってくる仲間を笑顔で迎えるためにツアーを再開した。

ここからは順調に、しかし慎重に進んで無事に須佐に到着。到着の直前には病院へ同行したスタッフから、仲間の怪我は擦り傷のみで骨折等の異常もないことが伝えられた。研修生も安心して病院から帰ってくるメンバーのお迎えに備えた。

病院からメンバーが戻ってきて再び6人での活動が始まる。少しの間ではあったが海に入ってリフレッシュすることもできた。しかし、ここまでグループで活動してきたのに、個の動きが目につく。また、この時に再び紛失物があったことが分かった。今度は箸が見当たらないとのことである。明朝明るくなって再度探してみるが、本日の出発地である神角に落としてきた可能性が高いとのこと。夜のミーティングでは今一度初日からのことを振り返りつつ、スタッフから6人の10日間であることの話があり、今日までのスタッフの投げかけの意味、ファイナルツアーの蜂や今日の転倒を例に危機管理と「手当て」について話をした。キャンプだけではなく、日常においても起こりうることで、子どもたちと関わる上での指導者としての立場での学びとした。

明日はいよいよサイクルマラソンである。最後のチャレンジに向けて研修生たちはステキな星空の下で話をしながらの夜となった。スタッフも、改めてサイクリングの安全確保の難しさを痛感し、明日の安全と成功を期して眠りについた。

9日目「サイクルマラソン・クリーンナップ」

期 日：平成29年8月23日（水）

場 所：須佐エコロジーキャンプ場～津和野～十種ヶ峰青少年自然の家

9日目の活動はサイクルマラソンである。初日から今日に至るまで、何の縁もゆかりもない、奇跡のように初めて出会った6人がそれぞれの目標とグループの目標に向けて常に一緒にチームとして活動してきた。ステキな仲間になったが、明日の閉会式を終えると各自の生活に戻っていかなくてはならない。このサイクルマラソンはそれぞれの生活への旅立ちの儀式である。6人がそれぞれ目標を設定し、その目標に向けて頑張る。そしてそれは競争ではない。個人のチャレンジだが、研修会に参加する前までと違うのは、9日間を共に過ごした他の5人の仲間も同じように頑張っている。横に仲間はいないが、近くで・遠くで理解し合える仲間がいる。そのことも感じつつ頑張ってもらいたい。その感覚は明日以降に実生活に戻っても同じである。今日は、昨日転倒してしまった1名はもう一度病院へ行き再検査を受けるため、5名でのサイクル

マラソンとなる。しかし、コース内のチェックポイントに設置する用紙に、この1名が昨晚書き込んだメッセージが示されている。病院に行くのだが思いはここにある。

須佐を出発してサイクルマラソンのスタート地点まで最後のグループツアーをし、いよいよスタートだ。各自が用意してあった紙に自分の目標を記入して、スタートしていった。コースは須佐から田万川、津和野から嘉年を通して自然の家へ戻るルートで、研修生はともに頑張っている仲間を感じながら自分のチャレンジをする。途中9ヶ所のチェックポイントでは、用紙に書かれた仲間の言葉を読みながら、更にそれぞれが自分のことや仲間のことに思いをはせて書き込んでいく。途中出会った仲間と談笑しながら、あるいは道端の湧き水に喜びの悲鳴を上げながら、全員がそれぞれ自分と向き合いすばらしいチャレンジをした。

自然の家へとつながる最後の上り坂は、サイクルマラソン最大の難関である。スタッフは、全てを出し切って帰ってきた研修生をとびきりの笑顔とハイタッチで迎えた。1人、また1人と研修生が戻ってくる。嬉しかったこと、悔しかったこと、苦しかったこと、同じ挑戦をしてきた仲間だから話せることをみんなで話しつつ、先に到着した研修生と一緒に帰ってくる1人ずつを盛大にお迎えした。「Good job!」

「Nice Challenge!!」

全員が自然の家に戻ってからは、この日までお世話になった装備のクリーンナップを行う。初日はきれいだった装備のザックやスパッツの汚れが9日間の活動を思い起こさせる。そのテントやザックについた泥などの汚れを落とす。来年度以降も研修生が使用する装備である。再びきれいにして次の人へとつないでいく。

ラストナイトミーティングでは、今日までを振り返りつつ、研修生の疑問にも答える形で、参加者として感じたことを大切にしたいこと、指導者の視点に立って考えることが伝えられた。



10日目「サービス・クリーンナップ・閉会式」

期 日：平成29年8月24日（木）

場 所：十種ヶ峰青少年自然の家

最終日はクリーンナップの合間に「サービス」という奉仕作業をした。OBSではプログラムの中でトレイルの整備等を行う「サービス」も重要なプログラムである。今回は、同時期に開催されている中高生のコースの手伝いをするようになった。中高生のクエストプログラムも今日が最終日で、マラソンを行う。このマラソンは研修会のサイクルマラソンと同じ目的で設定されている。そのコースの各所に安全確保のために研修生が配置された。来年以降スタッフとして関わるときに、スタッフがどのように運営しているかを知る機会でもある。そして前日に同様の体験をしている研修生は、今、中高生の気持ちに一番より添える人となっている。コースの安全確保が大切であることを身をもって知っている研修生たちは、スタッフの視点に立って、最後の

子が通過するまでチャレンジをしている中高生たちを支え、声援を送った。そして全走者が通過した後に各ポイントから1人ずつ合流して6人で走って帰ってきた。

午後の閉会式の前にそれぞれが感想を記入し、修了証でもあり記念の品となるバンダナに寄せ書きをした。仲間を想い、笑顔で思いを伝え合う、すてきな時間を共有できた。この時間は研修会の全日程を終えた研修生を新たな仲間と感じて頼もしく思える一時である。クリーンナップは終えたが、結局箸は見つからないままであった。研修生たちは子どもたちのコースにスタッフで入ったときのことも考え、その時どうするのかを考えて、今回は紛失してしまったことを自然の家に伝えて謝った。

初めて弟見山を3度も通り、いろいろな物を紛失したりしてきた今回の研修生、進んでは戻りを繰り返し、少しずつ、だけど確実に前に進んで成長してきた。たくさんを感じた分、これから子どもたちと関わる上で、思いや気持ちに共感してあげることのできる、すてきな指導者になっていけると思う。

スタッフたちは新しい仲間の誕生を喜び、またスタッフとして戻ってきてほしいと願い、それぞれの実生活へと帰って行く研修生を見送った。また会いましょう「行ってらっしゃい！」

